

令和 8 年 8 月 28 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

岩熊断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、岩熊（やのくま）断層の諸特性を次のように評価した（表 1、図 1）。

表 1 岩熊断層の特性

項 目	特 性	信頼度 (注 1)	根 拠 (注 2)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	岩熊断層		文献 1－5 および図 1 参照。
(2) 断層の位置・形状	断層の位置		文献 1－5 および地形の特徴から推定（図 1）。 一般走向は断層の両端を結んだ方向。
	（西端） 北緯 35° 29.3′ 東経 136° 7.5′	○	
	（東端） 北緯 35° 30.9′ 東経 136° 9.1′	○	
	地表の断層の長さ 約 4 km 一般走向 N40° E	○ ○	
(3) ずれの向きの種類	右横ずれ断層（北西側隆起の上下成分を伴う）	△	地形の特徴から推定。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	不明	—	
(2) 断層面の幅（注 3）	上端の深さ 約 0 km	○	地形の特徴から推定。 地震活動（D100）から推定。
	下端の深さ 15 km 程度	△	
	断層面の幅 不明	—	
(3) 断層面の長さ	不明	—	
3. 断層の過去の活動			
(1) 平均的なずれの速度	0.1m／千年程度（上下成分）	△	文献 6 による。

	横ずれ成分は不明		
(2) 過去の活動時期	不明	—	
(3) 1回のずれ量	1 m程度	△	断層の長さから推定。(注4)
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	全体で1区間	○	地形の特徴から推定。
4. 断層の将来の活動			
(1) 活動時の地震規模	M5.8程度	▲	断層の長さから推定。(注5)
5. 地震後経過率			
(1) 地震後経過率(注6)	不明	—	

注1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注2：文献については、以下のとおり。

文献1：活断層研究会編（1991）：「新編日本の活断層—分布図と資料—」，東京大学出版会，437p.

文献2：岡田篤正・東郷正美編（2000）：「近畿の活断層」．東京大学出版会，408p.

文献3：中田 高・今泉俊文編（2002）：「活断層詳細デジタルマップ」．東京大学出版会，DVD-ROM 2枚・60p.

文献4：今泉俊文・宮内崇裕・堤 浩之・中田 高編（2018）：「活断層詳細デジタルマップ[新編]」．東京大学出版会，USBメモリー・141p.

文献5：東郷正美・岡田篤正・澤 祥・鈴木康弘・堤 浩之・平川一臣（2005）：「都市圏活断層図 長浜」．国土地理院，D1-No. 449.

文献6：岡田篤正・加藤茂弘・石村大輔・山田浩二・末廣匡基・柳田 誠（2016）：琵琶湖北岸、八田部盆地の地下堆積物の層序と編年に基づく岩熊断層の活動性評価．地学雑誌，**125**，N115.

文献7：Asano, K. and Iwata, T. (2016) : Source rupture processes of the foreshock and mainshock in the 2016 Kumamoto earthquake sequence estimated from the kinematic waveform inversion of strong motion data. Earth Planets Space, **68**:147, doi:10.1186/s40623-016-0519-9.

文献8：気象庁（2016）：2016年4月16日熊本県熊本地方の地震—近地強震波形による震源過程解析（暫定）—. <https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/sourceprocess/event/2016041601250547near>（2018年7月確認）.

文献9：地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会（2026）：「「活断層の長期評価手

法（暫定版）」報告書（追補1）」. 4p.

文献10：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，**55**，795-855.

文献11：松田時彦（1975）：活断層から発生する地震の規模と周期について．地震第2輯，**28**，269-283.

注3：主要活断層の評価の中では、断層面の下端の深さは、地震観測結果から推定される地震発生層の下限の深さに基づいて推定を行っている。2016年に発生した熊本地震の例では、本震のすべり領域が、上記の方法で推定していた断層面の下端の深さよりもさらに5km程度深い場所まで延びていた可能性が指摘された（例えば、文献7、8）。そのため、地震の際に実際に活動しうる断層面の下端は、推定された断層面の下端に対して5km程度深くなる可能性があることに留意されたい（文献9）。

注4：文献10による経験式によれば、1回の活動に伴うずれの量 D （m）は、断層の長さ L （km）を用いて、 $D=0.1L$ と表される。

注5：文献11による経験式によれば、活動時の地震規模 M （マグニチュード）は、断層の長さ L （km）を用いて、 $M=(\log L+2.9)/0.6$ と表される。

ただし、長さ20km未満の活断層には適用できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注6：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

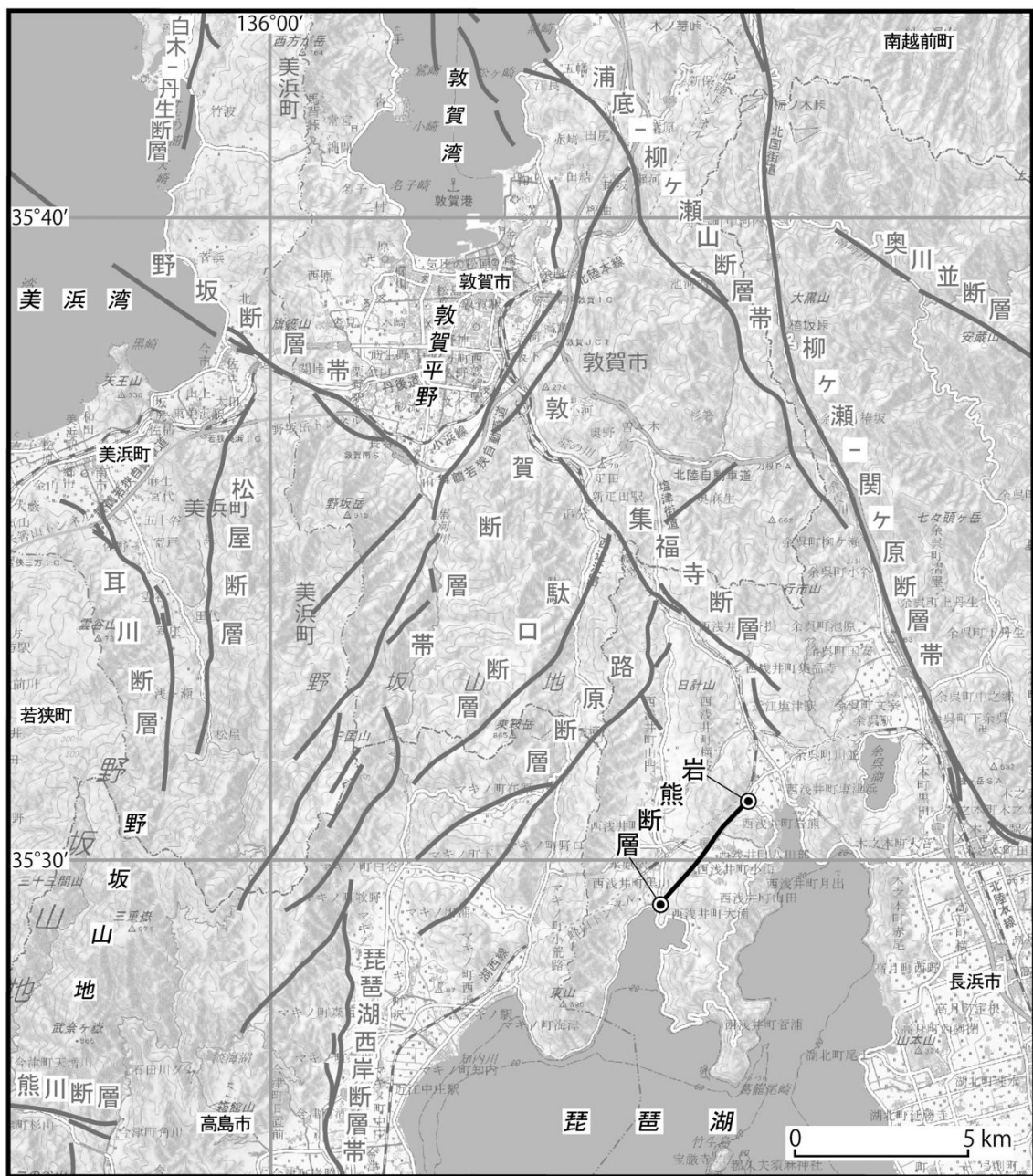


図1 岩熊断層の位置

●：断層の端点 1：八田部

基図は国土地理院発行数値地図 20 万「宮津」